

# 自由遊びの意義と実際

坂元彦太郎



## 一、自由遊びの意義について

何故か知らないが、幼児の教育について数々の議論がある中で、「自由遊び」を真正面からとりあげることがめったにないのは、私はふしきなことだと思う。「六領域」のことを論ずるのもざることながら、保育の実際の運び方という立場にたてば、ずっとこちらの問題の方が大きくて、しかも、さまざまに議論の種子になりそうなことが、いっぱいあるのである。あるいは、触れてならないタブーなのかもと思うが、あえてまないたの上にあげてみよう。

育要領には、わずか一ヵ所、何の説明なしに出ていているだけである。)先ず、「幼稚園の一日」の中に、標準的な一日の保育の内容として「自由遊び」があげられ、半ページにわたる説明がしてある。次には「幼稚園日課の一例」の中に、午前にも午後にも「自由遊び」があげられ、それそれに数行の説明がついている。保育所についても同様な記述がある。

さらに「幼児の保育内容」という章に、「自由遊び」という標題のついた節が独立していて、三ページにわたる記述がある。そのはじめに、次のような定義がある。

終戦後、自由遊びをどう考えたかの一つの例として、「保育要領」にある記述をとりあげることが出来よう。現在の「幼稚園教育要領」に当る位置をもって、昭和二十三年に刊行された保育要領には、自由遊びに関することに相当多くのページが費やされている。(幼稚園教

「子供たちの自発的な意志にもとづいて、自由にいろいろの遊具や、おもちゃを使って生き生きと遊はれる遊びが自由遊びである。  
そこでは活潑な遊びのうちに自然にいろいろの経験が積まれ、話し合いによって観察も深められ、くふうや創造が営まれる。また

自分の意志によって好きな遊びを選択し、自分で責任を持って行動することを学ぶ。……」

このような「自由遊び」の取り上げ方は、わが国の幼稚園教育では、全くはじめてであったといつてもよからう。むろん、そういう考え方や、それに基く実際も、幼稚園本来の伝統の中にずっと流れてきていたのではあるが、このように公式にとりあけられて、非常に重要な意義がはつきりと与えられたのは、最初であって、このことによつて、自由遊びが、はつきりと保育の中に位置づけられたといつてよからう。

そして、以上の引用によつて、大体、自由遊びの意義はわかるのであるが、これらの記述全体を繰り返し読んでみると、このことはが、いろいろな意味に使われているようである。このことが、保育要領が出てからちに、幼児教育界に一種の混乱をひきおこした原因にもなつてゐるようと思われる。

例えば、一日の日課の中で、登園・朝の検査・問食・休息・昼食・帰りじたぐ、という項目がならんでいて、それぞれの間に適当に自由遊びの時間が入れてあるのである。すなわち、園にいる間は、今あげた特殊な活動以外は、全部自由遊びとなつてゐるのである。ほとんどすべての保育活動を自由遊びといつてゐるようみえる。かと思うと、「自由遊び」の註釈に、「集団遊び、または音楽・お話・遊戯・紙芝居・人形芝居等適当に入れる。」とあつたりする。

これは、午後の自由遊びについてであつて、午前のはじめの方の「自由遊び」には、「朝の検査がすんだのち、自由に遊ぶ。その間に音楽・お話・リズム・観察・絵画・粘土・紙細工等のいずれかを、幼児の自由な選択にまかせて行う。時には約二十分程度、いつしょに集まつて行うのもよい。」とあるのである。

混とんとしている叙述を整理してみるとこうなるであろう。「自由遊び」を最も広義に使うときは、すべての保育活動を包括している。何故なら、どんな場合でも（音楽やお話の場合でも）こどもたちが自由意志で選択し、自由な気持で遊んでいるからである。

こういう使い方は、結局「遊び」ということばとほとんど同じ意味を使つてゐることであり、その遊びが少なくとも幼児の気持の上で自由なものでなければならないという主張をも含んでゐる。悪口をいう人は、何でも自由遊びとよぶことは、現実と理想とを全く混同している、と批評するわけである。善意をもつて解すれば、園の生活ではできるだけ子どもの自由意志で遊ぶことを尊重しよう、といつてゐるのだ、となるであろう。

しかし、集団遊び・音楽・お話などには、普通の自由遊びとは異質的なものがあるようにも書いてあるし、また、これらの扱い方にも、「自由な選択にまかせ、行」つたり、時には「いつしょに集まつて行うのもよい」ともいつてゐるのである。この点からみれば、狭義に「自由遊び」を考えて、それと対立する「いつしょに集まつて行

う」別種の活動がある、としているともみられるのである。

いいかえれば、広義に使つた場合は、「自由遊び」というのは遊び全体の異名にすぎないか、外形的なことはかまわないので児童の内面が自由でありますればいいのか、いずれかである。狭義に使うときは、「いっしょに集まって行う」活動ではなく、はつきり外形的にも子どもの自己選択による活動が露出してゐるのをいうのであって、同時に、主としてそゝした活動で占めているある長さの時間の区切りをいうのである。

かように、保育要領では、混とんとしていたが、幼稚園教育要領では「自由遊びの時間と、学級としてまとめて活動する時間とのバランスを適切にする」といつているように、素朴な常識的な考え方方に立ちもどつてゐる。

私は、こう思う。保育要領のもつてゐる、ロマンチック(?)な、自由に選択した活動をできるだけやらせたいという夢は常にもちながら、ことばとしては、幼稚園教育要領のような常識的な使い方をするのがいいと。

しかしながら、幼稚園教育要領はいわゆる国家基準を示すが故に、自由遊びのことについては一言も触れていないのである。であるが故に、幼児の教育においては、この書に詳しく述べてあることが大切であつて、自由遊びなどは論ずるに足りない、と解するのは、この書の趣旨にも反するのである。むしろ、自由遊びは、実際の保育

においてあまりにも重要で複雑な問題であるがために、かんたんに片付けられないために、それについて述べることが避けられてるのである、と解すべきであろう。

だから、われわれは、もっとこうした実際の問題について、いろいろ研究し、話し合う必要がある。しかも、時間的な分量からだけいつても、保育の時間の大部分もしくは相当な重要な部分を占めているのであり、自発性の育成といった最も重要な目標などからみても、その意義が重大だからである。

## 二、自由遊び時間の内容

「自由遊び」を、こどもたちが自分で選んでする遊びを中心にしている、保育時間のある区切りをいい、また、その中で遊ばれている活動をいうこともあるとしておこう。それに対して、「いっしょに集まつてする活動」や、「学級としてまとめて活動する」時間は、名称を何とつけるかは、みんなが一致しているわけではないが、それはとにかくとして、現在の普通の幼稚園では、よかれあしかれ、この二種の保育時間、ないしはその中味になつてゐる二種の遊びや活動を、しぜんに区別している。ところが、はつきりと毎日の日課に、この二種の時間を持てを定めて区切つてゐる園から、その時に応じてどちらの活動にも移りうるようにやつてゐる園までの間に、さまざまの段階のやり方があるようである。

そのうち、どれがいちばんのぞましいなどと、簡単に断定することはできない。要は、園の実情に応じ、保育の各方面的目標が達成できさえすればいいわけである。ただ、私がいたいことは、あまり理くつの上のことにこだわって、実際にやりやすい線から離れたり、実際やっていることとちがつたやり方をしているよう外には見せかけたりする必要はない。いいかえれば、あるときはもっと正直に、あるときはもっと弾力的にやっていけばいい。

それにしても、やはり、いくつかの点について一般的に論することができるであろう。

先ず、「自由遊び」といわれる単位時間の中味の問題である。たとえば、戸外であろうと室内であろうと、あるいはお話しや音楽やリズムなどのようにグループで活動するものでも、あるいは全く個別に活動するものであろうと、そういうことを一切かまわずに自由に選択させてこどもたちに遊ばせようという、全く開放的な考え方もある。それに対して、はつきりと内容を固定して、戸外における個別的な活動（少数のものたちが自然で集団的にやるような鬼ごっこのようなものまでを含めて）、砂場あそびやぶらんこなどをあそぶようなことをさせるような時間と考える人もいる。あるいは、午前中はじめの方は戸外あそび、一たん休息したり、組としてまとまりた遊びをしたあとでは、室内における自由なあそびをやらせる、といったふうな考え方もあるう。

こういうふうに、自由遊びの時間における活動の範囲や種類を明確に限定するかどうか、どういうのが幼児の保育にとってより効果的であるか、それぞれの園の実情にもとづいて考えてみることが必要であろう。しかし、一概に結論することはできない。何故なら、それぞれの園で、全体の保育の仕方や設備が、ちがつているからであり、とくに、その時間以外になされている保育とのバランスにおいて定められることであるからである。もし、その外の、学級としてまとまって活動する時間が、主として室内に限られているとするなら、自由遊びの時間は、できるだけ戸外で遊はせるのを本体にする、というのが自然であろう。また、午前の前半の自由あそびが主として戸外における運動であったから、後半は、それとなるべく性質のちがつた遊びをえらぶようにしむける、ということもある。なるべく、ひとりひとりのこどもたちが、バランスのとれた活動を経験できるように、自由遊びの時間の中でも、また外との関係においても、できるだけ工夫するのが、のぞましい。

また、自由遊びの時間の遊び方が習慣化するのはいいが、過度にマンネリズムにならないようには終気をつける必要がある。そうなると、遊びの内容がしだいに固定し、範囲が狭くなり、種類が貧弱になってくるであろう。絶えず、そなならないように工夫し、適当な時をおいて、新しい遊びの材料や方法を導き入れるようにしていかなければならない。ことに、あまり取り散らかさないような

面倒のない遊びにかたよる傾向もできてくるので、できるだけ活気に満ちた活動をとりいれることも努めるがいいと思われることが多い。

少しい過ぎになるが、自由遊びには、いっしょに集まつてする活動のときには得られないような、はつらつたる、少々は元気すぎるぐらいな活動もあつてもいい。そして、できるだけ、多種多彩、さまざまな種類のものがあることがのぞましい。外から見て、統一のある、きれいごとにわつてしまわないような、自由な遊びの展開であつてほしい。

### 三、自由遊びの時間の長さと順序

次には、自由遊びの時間の長さと順序の問題である。これにもいろいろなすがたがあつて、そのいずれがいい、とかなんんに断定することはできない。ただ、園の実情や設備から事情がちがうだけであつて、そのことはできない。

保育についてこの根本的な考え方の相異がここにもよく現われるのである。子どもの自由な自発的活動を重んじよう、というねらいが、しぜんに、自由遊びの時間を長くし、その時間を一日の日課のうちのいちばん大事なところに据えようとするであろう。時には、その形式だけを真似ていると思われる場面もあるが、こうした態度が原則としてわるからうはずはない。そして、わが国では、どちらかといえど、こういう日課のたご方が、正統派的な位置を占めていい。

すなわち、登園してきたら、できるだけ早く、幼児たちをめいめいの好きな遊びに誘いこんで、精いっぱいあそばせる。そのためには、各種の遊具や道具が用意してあり、いくつかの種類の活動がつづきに當まれるようにしくまれていて、先生は、いっしょになつて遊びながら、注意深く観察していく。そのときそのおりに適当な指導を加えている。そして、こどもたちがぐんと腹にこたえるほど遊びあきたころ、室にせせんに帰らせて、休息の意味もあるような、みんなでいっしょにやる活動の方に移つていくのである。

ところが、例えば、米国の幼稚園では、かならずしも、そうではない。むしろ、登園後ただちに組としてまとまつてする活動に入り、それをある程度しつかりやってから、自由遊びに移つていく——といつたやり方の方が、より普通であるようである。そして、時間の長さも、日本の場合より相当に短かいのが普通のようである。

いいかえれば、米国の方が、ずっと小学校の習慣に似ているといふことであるが、こうした点におけるわが国のやり方の長短をよく知つて、小学校との関連などから、考えてみる必要のある点だと、指摘しておきたい。

たとえば、三才児あたりの、しかも入園当初のころでは、いわば、ずっと「自由遊び」であり、ひとり対ひとりで教師があそぶより外はないであろう。自由遊びばかりだといつてもいいし、そういうこ

とばも不要だといつてもいいであろう。しかし、だんだん成長し、園の生活にもなってきたときには、やはり、自由あそびの時間と、組としてまとめて活動する時間が、したいにけじめがつくようになるのが自然であろう。そして、小学校入学間近になれば、小学校における授業時間と休みの時間の関係と思い合わせて、自由遊びの時間を、きちんと少し早く切りあげたり、ときには、自由遊びの時間を、あとの方にもつくるようなことを試みるのも、いいことだと私は思う。

また、自由遊びの時間に、ひとりのことが、いくつぐらいの種類の活動を経験するのがのぞましいか、といったことが、その長さの問題などと関係していくのである。こういうことについても、早急に論断ができないのはいうまでもないが、自分の組やひとりひとりの幼児の実態に即して、常に念頭において判断していなければならない問題である。花から花へと移るちよのうのように移り気でもいけないし、かといっていつもあまりにも長く一つのことしかしないのもいけないであろう。適当な、バランスのとれた活動ができるように注意し、それに合うような、自由遊びの時間の持ち方でありたい。

長さについても、また、順序についても、一応の習慣はできてるし、それでわるいことはない。しかし、また、そうでなければならぬということも定まっているわけではない。時には、わざと習慣を

はずして、新鮮な空氣をもたらすような企てもあってもいいはずである。自由な遊びがマンネリズムにおちいらないように、絶えず注意している必要がある。

#### 四、自由遊びの打ち切り方

第三に問題にしたいのは、自由遊びの時間の打ち切り方である。すなわち、いつ次の活動に移つたかわからないようにして自然に打ち切られて、保育室などに集まつてくるように仕向けるのがいい、というのに対して、鐘などの合図によつてきちつと秩序を守つて次の活動に入らせるのがいいという考え方もある。わが国では、かつて後者のようなやり方が支配的であつたのに對して、前者の考えが頭をもたげて今ではその方が正統派になっている。

たとえば「保育要領」でも、「自由遊びの打ち切り方」として、次のように述べてある。

「このものの遊びは尊重するが、友だちといっしょに暮らすことによつて当然起る生活のきまりには、その必要を自覚した自律的な行動をとらせたい。遊びの打ち切りも命令によって行うのではなく、その必要を自覚した自發的な打ち切りでありたい。」

文意がはつきりしない点もあるが、要するに、自由遊びの打ち切りは、その必要を自覚した自發的なものでありたい、というわけであろう。

少し誇張になるが、いわゆる自発性を尊重する人々が、自由遊びを必然に尊重するようになるのは当然として、わけても、この打ち切り方にいちばんこだわるようである。原則的にいって、打ち切り方も自發的でありたい、というのは当然であるが、しかし、いかなる場合でも、そうでなければならないとしたり、少なくともそうしたふりを整えねばならないような気持になつたりするのは、私は、どうかと思う。事実において、そういうことを主張する人たちも、そなばかりにはいっていないということを、経験していることであろう。

たしかに、幼児がある仕事なり遊びなりに没入しているのを、機械的に、ベルをならして引きもどす、というのが好ましいことではない。だからといって、時刻をさだめて次の活動に移らすのは、いかなる場合でもまちがっている、と結論するのはあまりに早急過ぎる。もとより、ある相当の長さの時間のうちに、没入の頂上を適当に過ぎさせるように、工夫し仕組むことはできないものだろうか。一、二へんは機械的に打ち切り過ぎたと反省しなければならない予想であつたとしても、適当に指導をしているうちに、その時刻でひとくぎりつけてもいいように馴れさせていくこともあるのであるのではなかろうか。

さらに、観点を変えれば、今興味をもつてやっている仕事を、あらざるところではつとやめて、次の別の活動に移る、ということに馴れる。

ることもまた、将来の社会生活のために、必要なことである。だからといって、保育をこまぎれみたいにしていいのではないが、昼食や帰宅の時に当然してあやしまないような打ち切り方を、その外に一べんぐらい経験させてもいいのではないか。

まじめな先生がたの中には、まじめであればあるほど、この自由遊びの打ち切り方に極度に神経質になつて、こともの自発性を抑えたのではないかと、ひどく悩んだりするのである。その気持は尊いが、私はこんなことはあまりこだわらないで、こどもたちの経験の全体のバランスや、活動のことどもらしい移り変わりに関心を向けた方がいいと思う。

ベルやブザーで打ち切らせるのは機械的だとして、あるきまつた曲のレコードをならして活動を転換することも、はやつているようであるが、それもよからう。しかし、あまり再々でなければ、ひびきのいいチャイムやベルでも、そう変わりはないことである。といつて幼児たちが口づてに「お集まり」といながら保育室に帰るのもわるいはずはない。そういうことの、どれかが必ずいちばんいい、といった考え方なしに、自分の園なり組なりの実情にふさわしい習慣をつくり、それを時代に応じて変化させていく、という、自在な心がまえがのぞましいと、私は思う。